

近年調査された京都府北部出土の 土師製筒形容器とその遺跡について

－経塚と墳墓を考える－

杉原和雄

1. はじめに

一般に、経典を主体として埋めたところを「経塚」と呼んでいるが、この遺跡は、経筒や経典に年紀が記されたり、出土品の種類が多いこと、さらに工芸的にも優品が含まれ、その遺物に見るべきものが多いために考古学的には早くから注目されてきた。『京都府遺跡地図』(1985～89)には古代から近世の経塚155件、古墓150件が登録されている。ただし、近世の一字一石経塚や墓地をさらに調査すればこの数字は一変する。本稿で取り上げる古代の経塚は、遺構・遺物の検出状態については不明な点が多く、遺跡としての理解を困難にしている。筆者は、1977年に京都府立丹後郷土資料館で開催された『経塚－丹後とその周辺』展を担当する機会に恵まれた折り、京都府北部(旧丹後5郡と丹波の天田・何鹿両郡)のいわゆる経塚と墳墓について資料紹介を行うとともに、伴出の土器類についても窯業史の観点から解説を行ったことがある。その後、上記の展示資料をもとに新たに発掘調査された資料を加え「経塚と墳墓」の性格等について、いくつかの小論^(注1)をまとめた。そこで検討したことは、1. 経塚と呼ばれる遺跡は、遺構の組み合わせの上でも、また時期的にも複合する場合が多いこと、2. その際、墳墓や墓地と一体化、または重複する場合が意外に多く、「埋経」が「副葬経」である可能性もあり得ること、3. 京都府北部に特に多くみられる土師製筒形容器(以下、土筒と略称)の用途について、銅製経筒を保護するための外容器(土外筒と略称)として使用されるほか、蔵骨器としても用いられること、また、京都府北部においてこの容器は12～13世紀を中心に、一部中世集団墓等で15世紀代まで使用されること、などであった。1989年の拙論では、京都府北部の12～13世紀(11世紀代のものはない)の銅(鉄)製経筒及び土筒出土遺跡は53件(うち銅筒は26件)であったが、その後10年が経過し、丹後国営農地開発事業等に伴う発掘調査等で同種の遺跡13件(銅筒は3件)が追加された。このうち7件は京都府埋蔵文化財調査研究センターによって発掘調査され、経塚等の性格を追求する上で注目すべき資料が提示されたので、同調査研究センター設立20周年記念論集の刊行にあたり、再度、経塚と墳墓、埋経遺跡等について考えてみたい。

2. 資料

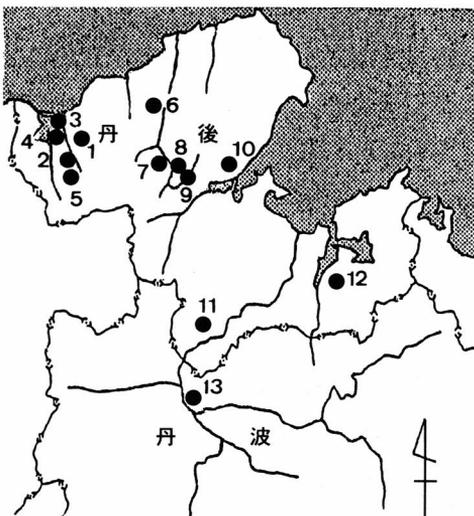
ここに取り上げる資料は、成相寺を除いて、報告書等^(注2)に公表されている。古墳や山城跡等として調査され、その過程で検出されたものが多い。この種の遺跡はすでに検討した53件を合わせると合計66件ということになるが、ここでは各担当者の報告書に学びながら新たな資料13件を中心に、適宜、既出の資料も加えて検討したい。

(1) 熊野郡

この地域には、この種の遺跡が集中しており、66件中20件をしめる。

①山形S X 03(第1表の番号1、以下同じ) 径約3m・高さ20cm程度の盛土の中央に30×70cmの小石室を構築し、内部に蓋付きの土筒2個を納置している。石室の上部に方形状の集石があった。室内には他に遺物はなく、土筒は片方の短辺側に寄せて置かれていた。すぐ南の小土坑から15世紀の丹波壺が出土、さらに周辺から、集石下に土坑を持つものや土坑内に簡単な石組を持つものが10基あまり検出された。伴出遺物は北宋銭1枚程度で顕著なものはない。これらの遺構からやや離れて一段低いところには近世の土葬墓2基がある。土筒の身の高さはともに約24cm、径は20cmと14cmを測る。調査者はS X 03のみを経塚と捉えているが、各遺構の配置、内容から見れば、この遺構のみを経塚とし、時期的にも古くできる根拠はなく、全体としては、丹波壺の時期と同じく15世紀前後の古墓群と考えるのが妥当であろう。与謝郡野田川町の地蔵山遺跡と類似する。

②豊谷遺跡 規模・内容において、特筆すべきもので、遺存状況が良好な11基が1群となっている様は壮観である。土坑群は、丘陵先端部の緩斜面を平坦に造成した東西6×南北4mの範囲に近接、または一部は切り合うように配されている。2号を除く10基の



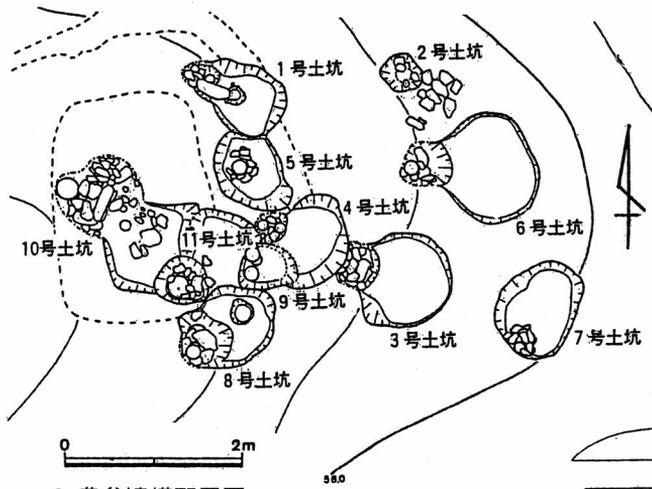
第1図 関係遺跡位地図
(番号は第1・2表に一致する)

上部に集石等は無く、土坑からは1個(1・4~8・11号)、または2個(3・9・10号)の土筒、計13個が出土した。これらの土筒はいずれも土坑の西側の壁面に寄せて置き、1・3・4・6・10号は明らかに西壁下部に小横穴を穿って、そこに土筒を納めている。9号を除くいずれの土筒も何らかの石組みで保護されていた。この石組みが小横穴に伴う場合は、前面と両側面及び筒上部を石で囲うことを基本とするが、雑な囲い方をする例もある。このような石組のあり方は

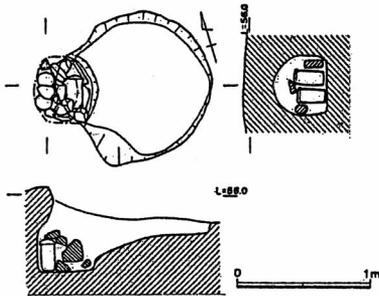
近年調査された京都府北部出土の土師製筒形容器とその遺跡について

第1表 京都府北部の土師製筒形容器等出土地名表1(1990～1999)
(遺構名称は各報告書等によった)

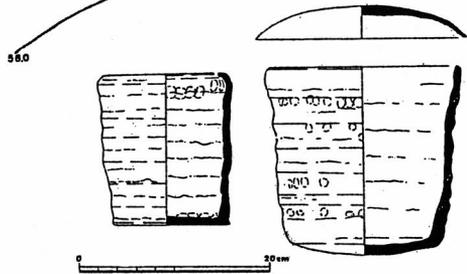
郡名	番号	名称	所在地	立地	銅筒・土筒等	筒内の経典等	伴出品	備考
(丹後国)								
熊野	1	山形S X03	久美浜町大井字山形	丘陵稜	土筒(2)			径3mの盛り土内に小石室
	2	豊谷1号	久美浜町丸山字豊谷	丘陵端	土筒	炭化物	銭貨	土坑と石組
		豊谷2号		丘陵端			土坑と石組の内部に粘土塊、集石	
		豊谷3号		丘陵端	土筒(2)	2個とも炭化物		土坑と石組
		豊谷4号		丘陵端	土筒	炭化物		土坑と石組
		豊谷5号		丘陵端	土筒		銭貨(3)	土坑と石組
		豊谷6号		丘陵端	土筒		銭貨・小皿	土坑と石組
		豊谷7号		丘陵端	土筒			土坑と石組
		豊谷8号		丘陵端	土筒	炭化物・銭貨	銭貨・小皿	土坑と石組、11号土坑を切る
		豊谷9号		丘陵端	土筒(2)			土坑、4・11号土坑を切る
		豊谷10号		丘陵端	土筒(2)	炭化物・鏡	銭貨・小皿(2)	土坑と石組
	豊谷11号	丘陵端	土筒			土坑と石組、10号土坑を切る		
	3	天王山A	久美浜町鹿野字天王山	丘陵稜	土筒(2)		鏡片・須恵甕・小皿・銭貨(6)・刀片	遺構は不詳、AはBの隣接丘陵上
天王山B		丘陵端		銅筒・土外筒	銅筒内に紙本経		土坑と小石室	
4	別荘	久美浜町鹿野字別荘	丘陵上	土筒	火葬骨		土壙、土筒に墨書あり	
5	谷垣	久美浜町永留字谷垣	丘陵端	土筒			土坑を2枚の板石で蓋	
竹野	6	大田南	弥栄町和田野字大田	丘陵端	土筒(4)	筒内に皿(1)		土坑と石組
中	7	通りS X01	大宮町口大野字通り	丘陵頂	土筒(3)			土坑と石組、上部に集石
		通りS X02		丘陵頂	土筒(2)			土坑と石組、上部に集石
		通りS X03		丘陵頂				土坑
	8	左坂S X01	大宮町周枳字左坂	丘陵端	鉄筒・土外筒		銭貨(23)	土坑と石組
		左坂S X02		丘陵端	土筒			土坑と石組
		左坂S X03		丘陵端	土筒			土坑と石組
		左坂S X04		丘陵端				土坑と閉塞石の内側に粘土塊
		左坂S X05		丘陵端	銅筒・土外筒		鏡・銭貨(3)・青白磁	土坑
	9	幾坂	大宮町周枳字幾坂	丘陵端	土筒			土坑と石組
与謝	10	成相寺	宮津市成相寺字白山	丘陵腹	土筒			土坑等不詳、周辺から蔵骨器多数、土筒に種字



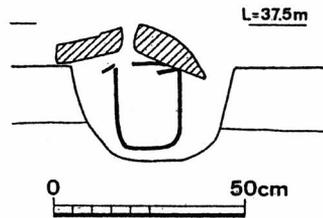
2. 豊谷遺構配置図



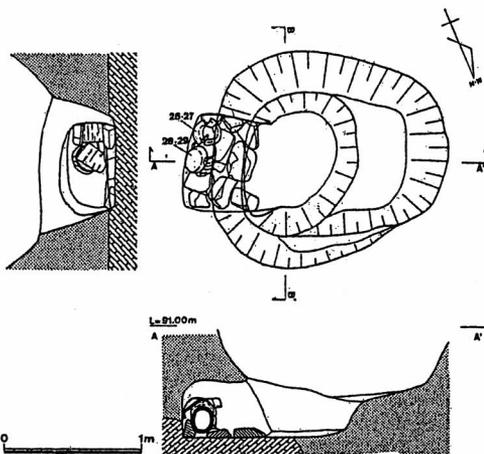
2. 豊谷3号



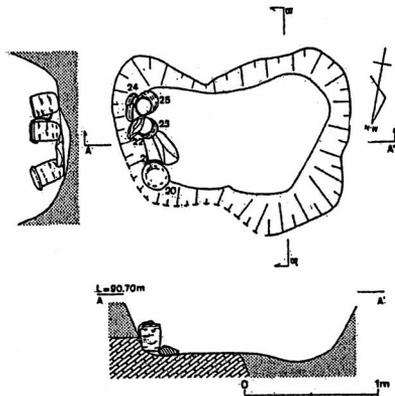
2. 豊谷の土筒



5. 谷垣



7. 通り S X 02



7. 通り S X 01

第2図 関係遺構・遺物図1(番号は第1表に一致する、各報告書から転載)

他の遺跡とも共通している。2号には何かの蓋をしたのではないかと思わせる粘土塊が見られた。6個の土筒内には炭化物があり、また銅銭1枚、菊花双鳥鏡1面が筒内に残されているものもあった。鏡には懸垂用の小孔があり、鏡背に布が付着していた。土坑は(調査者が主土坑と呼ぶ)長径1.2m程度・深さ60cm前後で、北宋銭や開元通宝1～3枚を出土する土坑が5か所、土師器の小皿を出土する土坑が3か所あったが、副納品としては質量ともに貧弱である。筒身の形、大きさは、実に変化に富み、径は最小11.2～最大25.5cmであるが12～14cmのものが多く、高さは16cm大が2個、他は20.5cm～最高30.1cmまでであるが、21～24cm大が多い。調査者は、主に遺構の切り合いから10号→1・3・4号→6号→11・7・8号→5号→9号の順に築造されたと推定し、主土坑内の土があまりにも柔らかいことから埋葬に伴う埋土とは考え難いとしている。この遺跡の特徴は、容器類が大小の土筒のみであること、副納品の中心は銭貨で、いずれの土筒も土坑の中心ではなく壁面に寄せて埋置し、そのうち半数は壁面に小横穴を穿って、そこに土筒を納めていることがあげられる。

③天王山A・天王山B 隣接した丘陵の古墳上にそれぞれ築造されていた。Aは、土筒の身2個体、銅銭6枚、須恵器甕の破片、小皿などが散乱した状態で採集された。Bは、円墳の頂部付近に楕円形状の土坑を設け、中央に加工された凝灰岩の板石を用いた小石室を構築し、内部に土筒を外容器とした銅鑄製経筒が納められていた。土筒にはつまみ付きの蓋があり、身の口径は14.8cm、高さ22.6cm、銅筒は身の高さ約21cmで、レントゲン撮影により内部に経巻が確認されている。土坑の上部は流失しているが、単独で築かれた簡素な埋経遺構である。なお、Aの南方約40mで、須恵器甕を横位にして口を板石で塞いだ遺構があった。AやBと共に13世紀初め頃のものであろう。報告者は3基とも経塚としている。

④別荘 台地上に位置し、12～13世紀の鍛冶工房跡内で検出された火葬墓である。長径1.24m・深さ約20cmの楕円形土坑の北壁に寄せて土筒1個が置かれていた。土筒は口径21cm、高さ15.5cmで皿状の蓋が付く。内部の7分目まで土と骨片が納められ、身の内面四方に4文字と蓋の内面には梵字様の墨書が見られた。また、この遺構の西40mの位置に60×80cmの方形土坑があり、内部から13世紀前半の須恵器片口鉢が出土している。

⑤谷垣 円墳の頂部に径60cmを測る小土坑を設け、中央に蓋付きの土筒を据え、さらに板石二枚で土坑を覆った単独の遺構である。経塚として報告されている。

(竹野郡)

⑥大田南 径30mの円墳上に築かれた単独の遺構である。長径1.5mを測る不整形土坑の西壁に小横穴を穿ち、内部に日常雑器の土師器鉢を置き、礫で閉塞後、主土坑を半ばまで埋め戻し、その後、東西に3個の土筒を並置している。小横穴に埋経、主土坑の3個の

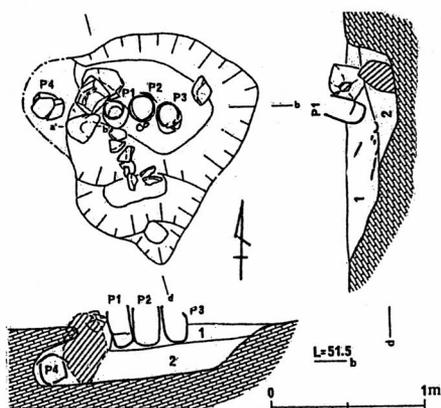
土筒は蔵骨器であろうか。小横穴内の蓋は口径18.8cm・高さ9.5cmの片口鉢、身の鉢は高さ15cm、土筒の高さは25～26cm、うち1個は径18cmの太身、また内部に皿1個が入っていたものがある。小横穴・主土坑の両方に土筒等が納められていた初例となるが、小横穴内に通有の土筒でなく鉢の転用品が納められている点が特異である。この種の転用品は、通常、蔵骨器として使用されることが多く、経筒とするにはなお疑問が残る。

(中郡)

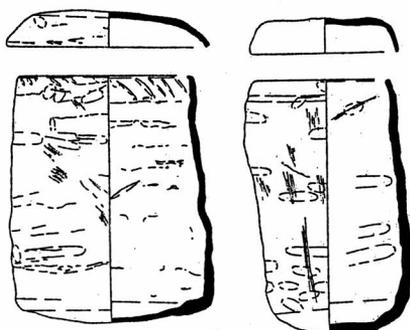
⑦通りSX01～03 古墳の墳頂部に近接して並ぶ遺構である。SX01・02は、ともに土坑を覆うように集石が置かれ、それぞれその下部に長径1mと1.8mの不整形な土坑を掘り、東壁下部に小横穴を掘り窪めて、各々3個と2個の土筒を石組内に納めていた。5個の土筒は身の高さが23cm前後、胴径約16cmのほぼ同形同大で、底に付着物がある。SX03は1.7×1.4m、深さ1mの隅丸方形土坑であるが内部は埋土のみであった。これらの遺構は周辺から出土した土師皿の年代から13世紀頃と推定されている。

⑧左坂 左坂B-1号墳の墳頂部にSX01～04、B-2号墳にSX05が築かれた5基の遺構である。SX01では、径1.2mを測る円形土坑の壁に小横穴を穿ち、土筒の外容器に納めた鉄製経筒が出土、小横穴を閉塞する石組が見られた。土坑内には散乱した状態で銅銭23枚があり、なかに南宋銭・淳熙元寶(1174初鑄)1枚が含まれている。鉄製経筒は総高(蓋を含む)24cm・径7.8cm、土外筒の身の高さ20.9cm・口径15.2cmを測る。SX02・SX03は、ともに径40～50cmの小土坑に横穴を穿ち、そこに土筒を各1個納め、SX01の壁を切り込んで構築されていたと判断されている。土筒2個は口径が12cm前後、高さ27.1と22.1cmで細身である。SX04は径約80cmの土坑に石で閉塞された小土坑が付き内部に径15cm・高さ8cm程度の円筒状粘土塊があった。②豊谷2号でも粘土塊が見られたが木製容器等の底や蓋として詰めたのかも知れない。SX05は径1.3mの土坑の北壁に小横穴を穿ち、そこに銅板製経筒を納めた土外筒が置かれていたが石組はなかった。土層の詳細な観察から、主土坑は当初、板のような物で蓋をされ空室状態であったが、後に落下した土が堆積したと判断されている。銅筒は口径7.6cm・高さ21.7cmを測り、側面は10個の鋸でとめている。土筒の身は口径15.2cm・高さ25.4cmで、器表は内外面とも刷毛で調整され、この種の土筒としては丁寧な作りである。北宋銭3枚と青白磁合子の破片が坑底から、径10.3cmの網双鳥鏡1面が土坑の表土層から出土している。鏡背に「南無阿弥陀佛」の名号墨書が3行ある。この遺跡は2か所に5基の経塚等を築いたもので、鉄製・銅製・土師製等各種の筒形容器を備えている点が大きな特色である。

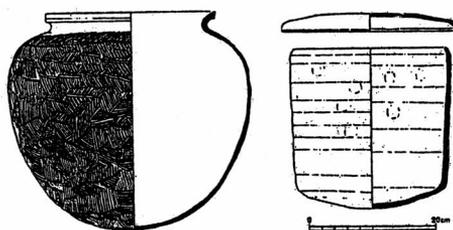
⑨幾坂 城跡や古墳の調査に伴って検出された遺構で、長径約1.2mの楕円形土坑に径60cmの小土坑が付設されている。小土坑は1段低く、主土坑との境に2石が立てかけられ、



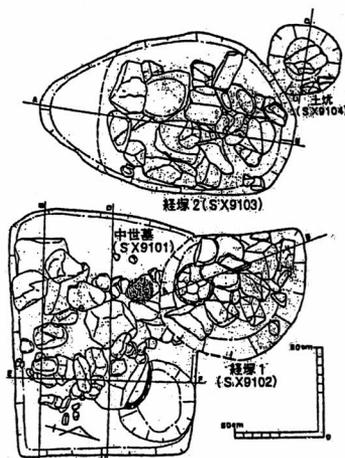
6.大田南



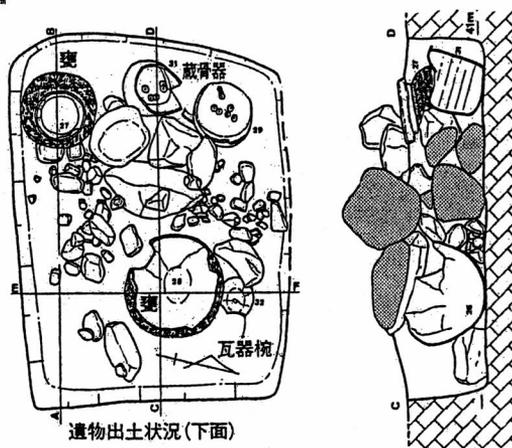
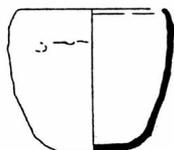
6.大田南の土筒等



13.高田山の蔵骨器

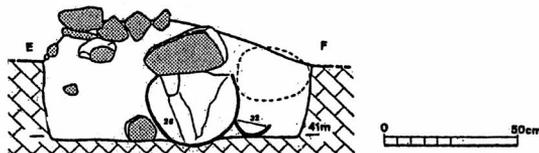


13.高田山遺構配置図



遺物出土状況(下面)

13.高田山 S X 01



第3図 関係遺構・遺物図2(番号は第1・2表に一致する、各報告書から転載)

第2表 京都府北部の土師製筒形容器等出土地名表2 (1990～1999)
(遺構名称は各報告書等によった)

郡名	番号	名称	所在地	立地	銅筒・土筒等	筒内の経典等	伴出品	備考
加佐	11	仲仙	大江町波美字仲仙	丘陵端	土筒			不詳、周囲に中近世の土墳墓
	12	天台南谷 S X 01	舞鶴市天台字南谷・下山	丘陵稜			鏡・短刀・小皿(2)	土坑と石組、上部に集石
		天台南谷 S X 02		丘陵稜		鏡・刀子・須恵甕	土坑と石組、上部に集石	
		天台南谷 S X 03		丘陵稜		鏡(2)・ガラス小玉・鉄器・木製品・須恵甕	土坑と石組、上部に集石	
		天台南谷 S X 04		丘陵稜	銅筒・須恵外甕		短刀	土坑と石組、上部に集石
		天台南谷 S X 05		丘陵稜			鏡	
		天台南谷 S X 06～10		丘陵稜				不詳、08は石組、上部に集石
		天台南谷 S X 11		丘陵稜			鉄器・小皿・白磁	方形土坑、上部に集石
		天台南谷 S X 12		丘陵稜			短刀・小皿・青白磁	方形土坑、上部に集石
		天台南谷 S X 13		丘陵稜			鉄器・小皿・白磁(2)	方形土坑、上部に集石
天台南谷 S X 14	丘陵稜	土筒(2)			陶壺	土坑と石組、上部に集石		
(丹波国)								
天田	13	高田山 S X 01	福知山市庵我字中	丘陵稜	土筒(2)	筒内に火葬骨と銭貨(7)と(10)	須恵甕(2)・瓦器碗	土坑、上部に集石、甕内にも人骨
		高田山 S X 02		丘陵稜	土外筒(2)	筒内に漆膜・木製蓋	銭貨(9)・瓦器碗	土坑、上部に集石
		高田山 S X 03		丘陵稜	土筒		銭貨(2)・青白磁小壺・青白磁小皿	土坑と石組、上部に集石
		高田山 S X 04		丘陵稜			須恵甕破片	土坑内に礫と炭

石に接して土筒1個が置かれていた。土坑の上部は流出しているが、もとは小横穴状の遺構であった可能性が高い。土筒は身の高さ17.1cmの小形品で、単独の遺構である。

(与謝郡)

⑩成相寺 三十三所観音霊場の二十八番札所である。現在地に移転したのが応永年間のことで、もとはさらに上方の山中にあったとされている。近年、山作業中に旧伽藍の周辺3か所から、偶然、多数の石塔類、蔵骨器と考えられる陶器類、集石遺構などが見つかり、宮津市教育委員会の調査によって成相寺の旧墓地と推測された。そのうちの1区画から越前、丹波焼の壺・甕、瀬戸の灰釉瓶子・鉄釉瓶子等とともに土筒1個が出土した。この土筒は口径10.8cm、高さ22.5cmを測り、内部に炭化物状のものが付着している。注目されるのは

筒の外側面に左回りで「南無一乗妙法蓮華經」〈種子〉〈種子〉「観応二年 辛 卯五月十八日」〈種子〉の墨書5行が見られることである。種子は1行に各5字が読みとれ大日如来・阿弥陀如来・弥勒菩薩などがある。出土状況が不詳なのは惜しまれるが、観応2(1351)年の年紀があること、やや細身の土筒で、14世紀中頃の資料として墓地内で検出されたことなど、土筒の使用時期や性格を考える上で貴重である。なお、宮津市域内では近年の発掘調査によって、大島の大島天神山遺跡で85cmの長方形土壇内を板石で2室に仕切り、1室から12世紀後半の須恵器甕1個と板石の隙間から北宋銭2枚が出土、石浦の三荘太夫・城ヶ腰遺跡では長辺1.25mの長方形土壇から13世紀代の須恵器甕や片口鉢、瓦器鍋などが出土している。これらは蔵骨器と考えられ、礫で蓋をしたり、容器を壁に寄せて置くなど土筒出土遺構と類似している。

(加佐郡)

①仲仙 円墳の表土層から土筒と蓋の破片が出土したものである。周辺から14世紀頃の土師器小皿や短刀を伴う不整形な土坑2基と近世の土壇墓が検出されている。

②天台南谷 北東方向に延びる稜線上に一列に配置された14基の遺構で、土坑は長径1.5から2mを測る大形の不整円形、または方形である。全ての土坑の上部に集石が確認されたが、土坑の内外ともに後世に攪乱を受けた部分もあったようである。丘陵先端側のS X 01～04・08は土坑の壁に小横穴を穿って石組を設け、S X 02では倒位の甕を、S X 04では倒位の甕内に銅鑄製経筒を納めていた。S X 04では土坑内を石で区切りさらに2室を設けていたが、内部に遺物はなかった。S X 01・03・08の小横穴に遺物はなかったが、土坑からは和鏡・短刀・小皿などが出土した。S X 05～10は遺構の残りが悪く、遺物もS X 05の和鏡1面のみであった。S X 11～13の方形土坑からは鉄器、白磁碗・皿、土師小皿が出土している。S X 14は方形土坑の中央に小石室を設け、壁側に石組で囲んだ倒位の壺1個と土筒2個が一括して置かれていた。中央の小石室内は空であった。

この遺跡は多数の礫石を丘陵上に運んで構築した大がかりなものである。先端部の5基は円形土坑に和鏡と鉄器、奥の3基は方形土坑に白磁と鉄器が埋納され、明らかに2つのグループが想定でき、時期差を示す可能性もある。また、ひとつの土坑に複数の石組や小石室を構築しており、全体では相当多数の埋納施設を準備したものと推定される。和鏡の豊富さから、裕福な一族による造営と考えられるが、銭貨が見られないのは意外である。土筒の身の高さは内法で18cmと16cmと小振りである。S X 02・14で検出された倒位の甕・壺の内には何もなかったが、何を納めて覆っていたものか興味深い。与謝郡岩滝町塚ヶ谷経塚では、常滑の甕を倒位にして内部に銅筒を納めていた。1954年に中郡大宮町森本の丘陵で出土した12世紀の常滑中型甕は板石の上に倒位に置いたもので、板石上には灰がたくさ

ん見られた。滋賀県日野大谷古墓群では倒位の壺が蔵骨器として検出されている。なお、この遺跡はすぐ前面に広がる丹後では数少ない天台系寺院である天台寺との関係が注目される。

(天田郡)

⑬高田山 見晴らしのよい丘陵上の方形墳頂部に築造された埋経土坑等4基である。S X 01～04は隣接し、S X 01と02、03と04は切り合う関係にある。報告者はS X 01を中世墓、02と03を経塚、04を土坑として報告している。S X 01～03はいずれも上部に集石が認められた。S X 01の外観は塚状を呈しており、内部に1×1.37mの方形土坑を設け、西壁に須恵器甕1個と瓦質の土筒2個を併存しておき、東壁寄りの所にやや大きめの甕1個を置いていた。土坑の床面は平坦である。東の甕には多量の人骨が入っていたが、板石で蓋をしていた西の甕の内部には何もなかった。2個の土筒には人骨が納められ、底には北宋銭7枚と10枚とがあった。筒身は口径18cm、24cm、高さ23.2cm、25.2cmで、高さは通有であるが口径は大きい。土坑内には径約14cm・厚さ17cmの範囲に火葬骨が残され、瓦器椀も出土した。S X 02は、長径90cmの不整円形土坑で、壁に寄せて土筒2個があり、周辺から北宋銭9枚と瓦器椀が出土した。当初から土筒2個の内部に漆膜と円盤状の木製蓋が認められたが、その後の慎重な調査によって、漆膜に残された筋状の痕跡等から各々3個体の竹筒があったと想定された。漆膜には金・銀箔が一部遺存していることも確認された。2個の土筒は口径17.8cm、20cm、高さ21.2cm、22.7cmを測る。つまみ付きの逆印籠蓋で、造り出しの径から竹筒の内径は5.6cm程度、また竹筒の高さは漆膜から約20.4cmと推定された。木製の底板は見られない。S X 03は長径1.4mの楕円形土坑で南壁の下部に小横穴を穿って石組みし、内部に土筒1個を納めたものとされている。石組の周囲から青白磁の小壺・小皿が出土した。北側では土坑底が1段高くなっており、そこから北宋銭2枚が出土した。S X 04は径40cm・深さ58cmの土坑で、上部に1石を置き内部から甕の口縁部1点が出土した。この遺跡は出土した甕や瓦器椀の形式から13世紀の初め頃と考えられる。土筒が外筒や蔵骨器として多用な使われ方のあることを証する遺構として重要である。なおこの種の木製蓋は、京都市花背の経塚、福知山市大道寺遺跡に次いで本例が3例目である。大道寺の竹筒は内径6.5cm前後・高さ22.3cmと復元されている。

3. 土師製筒形容器を出土した遺跡の性格について

立地

いずれの遺跡も集落等との比高差が50m以内で、多くは20～40m程度の見晴らしのよい丘陵端や稜線上が選ばれている。比高差の少ない丘陵の場合は、中・近世墓地の選地と

も一致する。また「古墳」と重なることが多いのは偶然ではなく、その地が村人の伝承により何らかの霊地と意識されてきた結果、意図的に選ばれたと考えられよう。このことは鎌倉時代頃まで、村人の間に「古墳」が墳墓としての確証はないにしても、特殊な場所として意識されていたことを思わせる。

遺跡の推定年代

12世紀第4四半期～13世紀初頭……②豊谷・⑤谷垣・⑧左坂・⑫天台南谷

13世紀前半……③天王山・④別荘・⑥大田南・⑦通り・⑨幾坂・⑬高田山

13世紀後葉以降……⑩成相寺・⑪仲仙

15世紀前半……①山形

⑦通り・⑬高田山は13世紀前半でも早い時期であろう。

遺構

②豊谷では、11基中10基が壁に小横穴を穿つか、または壁に寄せて石組みし内部に土筒を納めている。この場合、小横穴も端に寄せて土筒を置いているものと解釈できる。土筒等を土坑の中央に置かず、端に寄せる例は、④別荘・⑥大田南・⑦通り・⑧左坂・⑨幾坂・⑫天台南谷・⑬高田山にも見られ、今回紹介の13件中8件を占める。かつて調査された久美浜町権現山・福知山市大道寺・綾部市私市円山及び近隣の兵庫県出石町田多^(注3)地、同和田山町一乗寺^(注4)経塚でも同様の小横穴が見られ、丹後・丹波北部・但馬で合計13件が確認されたことになる。端に寄せる意味については、②豊谷ではほとんどが西方に寄せているが、他の遺跡では必ずしもそうではないので、仏教上の意味があるのかどうかは不明だが、単に石組が構築しやすいと言うことのほか、盗掘等から守る意味があったのかもしれないし、土坑の中央に空間を確保するためとも考えられる。さらに、権現山・⑧左坂・⑫天台南谷・大道寺・私市円山・田多^(注3)地・一乗谷の7遺跡では、小横穴内から銅製、鉄製または竹製の経筒が検出されているので、埋経されたことは明らかであり、小横穴は、一義的には埋経空間として捉えることが自然である。その分布は丹後・丹波北部・但馬に広がるが、同形態の遺構を持つ②豊谷・⑦通り・⑬高田山等を含めると、中心は丹後にあると理解され、この種の遺構を「丹後型埋経遺構または遺跡」と呼ぶことができるであろう。また、かつて指摘したように、小横穴や石組に伴う土坑等の空間は副納品(または副葬品)や火葬骨などを納めた可能性を考えたい。この場合、経筒内の経典は副葬品のような性格になるのだろうか。なお、②豊谷の場合、11基の土坑に伴う13個の土筒は小横穴内にあることから、外筒または経筒と考えることが妥当であろうが、土筒に小形品が含まれ、形態にも規格性が見られないことから蔵骨器である可能性は残される。この時期には埋経と埋葬が同じような遺構の形態をとる場合も考えておく必要があるようにも思われるからである。

次に、土筒をもつ遺構群を整理するとA・B・Cの3タイプに分けることができる。

A 単独の遺構。⑤谷垣は小土坑の中央に土筒1個、③天王山Bは銅筒をもつ埋経遺構で、③天王山A、⑥大田南、⑨幾坂、⑪仲仙も同様な単独遺構。土筒のみが出土した場合はその遺構が埋経か埋葬かは速断できない。

B 2基以上10基前後の遺構群。a あまり広くない範囲で面的にまとまって築かれているもの、b 稜線上に線的に配置されるものがある。さらにa・bとも、1=土筒のみが出土(②豊谷Ba-1、⑦通りBa-1)、2=土筒と銅、鉄、竹筒等が出土(⑧左坂Ba-2)、3=1・2に加えて甕や壺も出土(⑫天台南谷Bb-3、⑬高田山Ba-3)に分類できる。B類は埋経と埋葬が混在する遺跡として注意する必要がある。

なお、⑬高田山は竹製経筒を納めた土筒2個と火葬骨を納めた土筒2個及び須恵器甕が近接した2つの土坑で検出されているが、これは当初から付設関係にある土坑ではなく、本来独立した遺構と捉え、後に追善供養のため埋葬地に経塚を営んだ遺跡と考えられないであろうか。また、⑫天台南谷は14基の遺構が一直線に並ぶ典型例で、蔵骨器とも考えられる甕や土筒も出土し、調査者も方形堀形のSX11~14は墓と考えている。遺構が一列に並ぶ遺跡として綾部市藤山遺跡があり、また少し離れた福井県敦賀市深山寺^(注5)経塚でも尾根状に10基以上が並び多くの壺・甕に混じって火葬骨の入った常滑三筋壺が出土している。

C 尾根の稜線や斜面に営まれるいわゆる中世集団墓で、主として木箱や陶磁器・須恵器等を蔵骨器とするが、土筒も蔵骨器として少量使用される遺跡。今回は①山形・⑩成相寺をあげているが、ほかに加悦町福井・野田川町地蔵山・同雲巖寺・福知山市大道寺などをあげることができる。丹後地域で数10基以上の埋葬施設を設けた集団墓が本格化するのには14世紀以降のようである。他地域の好例として滋賀県日野大谷古墓群、三重県横尾墳墓群等がある。

上に述べた遺構・遺跡を埋経の観点からみると、①経筒を地下に埋めて保存・保管を図る、いわゆる経塚としての埋経、②副葬経としての埋経、③墳墓や社寺及びその周辺、霊山などへの追善供養等としての埋経、④埋葬遺構と埋経遺構とが広い範囲で混在する遺跡、の4通りに分けることができる。今後の調査や検討にあたる場合の留意点としたい。

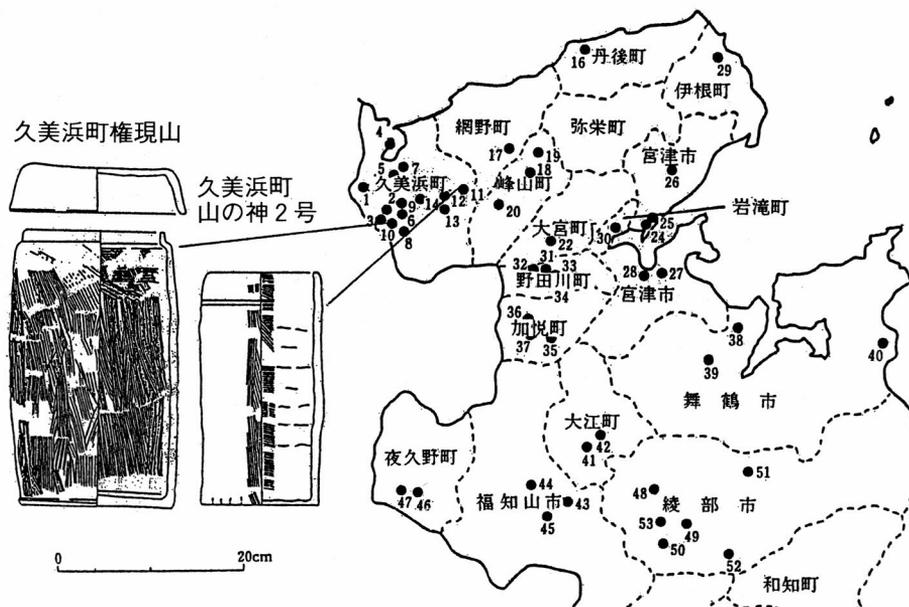
土筒の用途など

今回の発掘調査資料によって、土筒には、①経筒、②経筒を納める外筒、③蔵骨器、の3通りの用途があることが判った。今回、④別荘や⑬高田山の土筒内に火葬骨が認められたが、京都醍醐寺三宝院宝篋印塔下の瓦筒、日野大谷古墓群の土筒2個でも確認されている。また、⑬高田山の土筒2個の底には北宋銭7枚と10枚があり、その上に火葬骨を納めていて、銭貨と納骨の強い関係を示唆している。大阪府枚方市藤田山遺跡^(注6)で、胴径27cm・

高さ20cmの土筒の底に砂を敷き、その上に六道銭を予測させる北宋銭5枚と南宋銭・慶元通宝(1145初鑄)の併せて6枚を置き、上部に火葬骨が納められていた例がある。丹後地域等でも銭貨が主土坑内にばらまかれたような状況で検出されることも多い。銭貨は埋経遺構^(注7)にも伴うが、古代以来、鏡と共に埋葬に伴うものが多いのも事実である。

今回、土筒が2個、まれに3～4個を並置する資料が11例も得られた。これらは同時埋納であることは明らかだが、複数の経筒等と見るか、経筒と蔵骨器、あるいは⑬高田山のように複数の蔵骨器とするかなど慎重な判断が必要であろう。

丹後・丹波北部では、既出の資料も含めると、53遺跡で111個の土筒が出土している。このうち経筒の外容器として使用されたことが確定しているのは11個である。銅製経筒は29遺跡で58個(現存しないものを含む)、鉄製経筒は3遺跡・3個、竹製経筒は2遺跡・8個に比べて、土筒は圧倒的に多いことがこの地域の特徴といえるであろう。近隣の但馬、播磨、丹波の多紀・氷上郡、伯耆、越前、近江にもこの種の土師製筒形容器の出土は見られるが、丹後の出土数は群を抜いており「丹後型土師製筒形容器」と呼んでも差し支えはないと考える。また丹後等では、この土筒の使用期間の上限は河原山・藤山等の12世紀中頃、下限は地藏山・①山形の15世紀中頃とすることができる。河原山・藤山の土筒は形態・成形手法の点においてやや異質なものであり、土筒が盛行し、その用途が多様化するの12世紀後半以降である。土筒の製作には、須恵器及び渥美・常滑の陶製筒形容器や甕・壺の



第4図 京都府北部の1989年以前の土筒等出土遺跡(53件)位置図
および土師製筒形容器(注1・1989文献から)

ように窯業の工人集団を必要とせず、集落の一角で村人が必要量だけ焼成したのであろう。当時、日常容器や蔵骨器、埋経容器として高級感のある中世陶器や輸入陶磁器は流通量に限りがあり、丹後地域のごく少数しか出土しない地域では、土師器小皿や椀と共に、独自に土筒を製作したものと考えられる。これらの土筒は古代末から中世に至る長期間、丹後の熊野・与謝両郡を中心に墳墓や埋経の容器として広く普及したものであろう。今後、土筒の法量、成形手法等の詳細な検討、土筒内に残された有機物や土壌の分析などが課題として残されている。

4. おわりに

1990年以降の発掘調査によって土師製筒形容器が出土した遺跡を中心に、埋経と墳墓の関係及び土師製筒形容器の用途などについて検討した。丹後を中心とする地域では最古グループの埋経遺跡として、岩滝町塚ヶ谷・宮津市河原山・舞鶴市油江・綾部市藤山・久美浜町山の神1号(円頓寺経塚)遺跡をあげることができるが、いずれも12世紀の第3四半期に築かれたものである。全国では、古代の埋経遺跡はその盛行期が11世紀後半から12世紀末であり、約400件ほどが知られている。丹後等の盛行期は12世紀の第4四半期から13世紀中頃である。12世紀の中葉以降は、全国的にも経塚に追善供養や現世安穩のような願意が持ち込まれることが多くなると云われており、その現象が丹後等の埋経、または墳墓の遺構・遺跡に色濃く反映されているものと解釈される。また12世紀末から13世紀にかけて地方官人や富裕層が築いたと考えられる土筒出土の遺構群は、後に展開するいわゆる中世集団墓の先駆的なものとも位置づけられるであろう。しかしながら、^(注9)『経塚』と呼ばれる遺跡には不明な点が多く今後とも多角的な考究が必要である。

本稿の執筆に際しては資料の実見・検討などで各担当者の方々をはじめ、東 高志・吉岡博之・伊藤 太・森下 衛の各氏にお世話になり、また三宅敏之氏・関 秀夫氏には日頃から経塚に関する論考や資料を送付いただき、そのうえ温かいご指導をいただいている。記して感謝したい。

(すぎはら・かずお=京都府立山城郷土資料館長)

注1 拙稿「福井遺跡出土の遺物について」(『金屋比丘尼城遺跡発掘調査報告書』加悦町教育委員会) 1980
 同「二ノ宮経塚調査概要」(『水無月山遺跡発掘調査報告書』京都府立丹後郷土資料館) 1980
 同「京都府北部の須恵器生産について」(『丹後郷土資料館報』第2号 京都府立丹後郷土資料館) 1981

同「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」(『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会) 1981

同「経塚遺構と古墓」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

同「経塚と墳墓—丹波・丹後を中心とした筒形容器出土の遺跡について—」(『考古学雑誌』第74巻第4号 日本考古学会) 1989

同「京都府綾部市所在の「永久二年」銘石碑について—資料的価値の再検討」(『史迹と美術』第619号 史迹美術同協会) 1991

注2 番号は第1・2表に一致する。

1. 岩松 保ほか「山形古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第44冊) 1991

3. 黒坪一樹「天王山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第76冊) 1997

4・5. 増田孝彦・岡崎研一「別荘遺跡」・「谷垣遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第83冊) 1998

7. 石崎善久「通り古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊) 1992

8. 石崎善久「大宮町左坂古墳群の経塚状遺構」(『京都府埋蔵文化財情報』第76号) 2000

13. 小池寛「高田山古墳群 付、高田山中世墓・経塚群」(『京都府遺跡調査概報』第49冊) 1992、同「竹製経筒の復元について」(『京都府埋蔵文化財情報』第52号) 1994

以上(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター。

2. 肥後弘幸「豊谷遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1992

6. 横島勝則ほか「大田南遺跡」(『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡 第2次～第5次発掘調査報告書』京都府弥栄町文化財調査報告第15集 弥栄町教育委員会) 1998

9. 橋本勝行「幾坂経塚」(『左坂古墳群・幾坂経塚・幾坂城跡発掘調査概報』京都府大宮町文化財調査報告書第12集 大宮町教育委員会) 1998

10. 宮津市教育委員会東 高志氏の調査による。一部は『宮津市史』史料編第一巻(1996)に掲載。

11. 松本学博「仲仙1号墳発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第3集 大江町教育委員会) 1997

12. 松本達也「天台南谷遺跡」(『上佐波賀遺跡・天台南谷遺跡発掘調査概要報告書』舞鶴市文化財調査報告第32集 舞鶴市教育委員会) 2000。

なお、竹野郡丹後町徳光に所在するおつか古墳の墳丘表土層等から土筒の可能性のある破片1点と綾杉状叩き痕を残し明らかに中世須恵器と思われる破片が出土している。ただ土筒状品の器体の調整手法や断片であることなどから、他の器種とも考えられ、ここでは保留しておきたい。吉田 誠『おつか1号墳(京都府丹後町文化財調査報告第8集)』丹後町教育委員会 1991 肥後弘幸氏の御教示による。筆者は未見。

注3 森内秀造ほか『田多地古墳群 田多地経塚群I』出石町教育委員会 1985

注4 中村 弘「兵庫県一乗寺経塚とその出土遺物」(『考古学雑誌』第77巻第4号 日本考古学会) 1992

- 注5 敦賀市立歴史民俗資料館『深山寺経塚遺跡展』1988
- 注6 藤田山遺跡調査団『藤田山遺跡調査報告書』(枚方史料刊行会) 1976
- 注7 森島康雄「京都府における銭貨を伴う経塚」(『出土銭貨』第6号 出土銭貨研究会) 1996
出土銭貨の枚数の違いを遺構の性格の違いに求める考えは興味深いのが、Bタイプとされた遺構の捉え方などを含め、今後の資料の増加を待ちたい。
- 注8 吉岡康暢「経外用器からみた初期中世陶器の地域相—須恵器系中世陶器を中心に—」(『石川県立郷土資料館紀要』第14号) 1985
- 注9 筆者は、古代から近世に至る埋経関連遺跡を「経塚」としてひとくくりにして“末法思想に基づき弥勒の再生まで経典を地下に埋納して保存しようとした遺跡”と言うような解説が博物館等で多々見られることについて疑問を感じている。実体としてそのような経塚はあまり多くないと考えられるからである。同じ墳墓の遺跡でも、古墳時代の「古墳」と近世の「墳墓」とでは性格も構造も異なるのは当然であり、いわゆる「経塚」も古代と近世では内容は全く違っている。近世まで含めて言う場合は三宅敏之「経塚研究の課題」(『月刊考古学ジャーナル』第153号)1978にあるように「経典を主体として(仏教的作善の一つとして)埋めたところ」との定義が適当と思われる。また、関 秀夫「経塚とその遺物」(『日本の美術』第292号 1990)で提唱されるように、古代を「埋経の経塚」、中世を「納経の経塚」、近世を「一石経の経塚」として説明していくのも観覧者に対して親切であると考え。そういった見直しが仏教遺跡としてのいわゆる「経塚」を各地で再度検証することにもつながるのではないかとと思われる。また、発掘調査報告書等では「埋経遺構」、「埋経遺跡」という用語で説明していくことがよいのではないかと考える。



第5図 福知山市高田山経塚 S X 01